
ミルクティー

ネコミワコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミルクティー

【コード】

N0506A

【作者名】

ネコミワロ

【あらすじ】

孤独を感じている主人公が年下の元彼との再会や、今の不倫中の彼との出来事を通して少しだけ変わっていく話。

ミルクティー

あれは冬の晴れた日の夕方でした。

あなたと私は川沿いの小道を歩いていて、あなたはその大きな手できゅっと私の肩をひきよせると、寒いね。って言いました。私は、あつたかいよ。って言ってあなたを見て笑いました。そして初めてのキスをしました。

唇は少しだけ触れて、ふとりとも少し照れました。

あなたはあの日のことを覚えているかしら？

甘くてまったりとして、でものももどさらつと溶けて消えていく。あなたはアイスマルクティーみたいな人でした。

私達が別れてからもう8年も経ってしまいましたね。私は一ツ年下のあなたを田舎に残して東京の大学に進み卒業すると、希望通りの就職をして、冬の晴れた日の夕方に外の景色が見えるカフェでミルクティーを飲みながら、こうしてあなたのことを思い出したりしています。

あなたは今、どうしているんでしょう？あなたと別れるとき、いろんな人からひどい女って言われました。特に私と仲の良かったカナはあなたのこと少し好きだったから、私のことをすごく怒りました。あのとき付き合いだした人とは半年で別れました。

あんなミルクティーみたいな恋は私にはもうできません。あなたがまだミルクティーみたいな人だったらいいなあと思います。

いじわる

「もうすぐ誕生日だね？どこかにおいしいものでも食べに行こうか？」

彼は私を抱きしめる。背中に素肌の温かさを感じる。

「どこがいい？」

聞きながら私の首筋をなぞるくちびる。

「どこでもいいよ。」

私は両腕で彼の右腕にしがみつく。

彼はわたしの背中に強くくちづけける。

「あ、そういえば。」

行きたいところがあるの。

大きな水槽があるイタリア料理屋さん。

めずらしい熱帯魚がいるみたい。」

私はめいっばいあなたの方を向いて、私たちは見つめあう。
そして深いキスをする。

「どこにあるの？」

彼が聞く。私が答える。

「品川駅のすぐそば。」

長い沈黙のあと。

「ごめん。無理。」

「冗談よ。ちょっと意地悪したの。」

自分に意地悪。彼はそんな私をもっと強く抱きしめる。

「何が欲しい？」
私はちよつと考えた。

「愛が欲しい。」

「愛してるよ。」

なんて嘘っぽい言葉。

彼は品川の駅のそば、奥さんの待つ明るい部屋に帰っていく。

そんなこと分かりきってる。

突然の偶然

私達は

同じ午後

同じ東京の

同じお店に入り

そして同じ本を

同じ瞬間に

手にとろうとした。

昔と同じ指先と

変わってしまったわたしの指先が触れ合い

私達はお互い躊躇った。

そして驚いた。

私は自分の中から時間がきえてしまったのかと思った。
瞬間のタイムスリップ

「すごい偶然。」

先に言葉をとりもどしたのはあなただった。

そして昔と同じ笑顔で笑った。

「どうしてここにいるの？」

驚きと少しだけの非難。

あなたにはあの町にいてほしかった。

「どうしてって・・・なんだか怒ってるみたいと言っね。」

「別に怒ってないけど・・・こんなところで会うと思ってなかったから。」

「今時間ある？せっかくだから少しお茶でもしよっよ。」

それはカフェでミルクティーを飲みながら
あなたを思い出していた午後から
ちよつと一週間後のこと

この突然起こった偶然に
必然的な運命を

私は今でもときどき感じるの。

突然の偶然（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
久しぶりに書きました。

よかったです感想お聞かせ下さい

冷たい朝

起きたらすぐく空気が冷たくて
ああもしかして・・

思いながらカーテンを開けたら
今年最初の雪が降っていた。

窓を開けて手を伸ばすと小さな小さな白い結晶がいくつか手のひら
に止まり

そしてあつという間に透明な液体に変わった。

その様子はなんだかとても切なくて少し笑った。

シンシンシンシンシンシン

静かに静かに、でも勢いよく、いさぎよく降り積もる雪をみながら
少し救われた。

私は昨日あなたに会って、昔のことを思い出してしまった。

一人でしんみりして普段はあんまり飲まないウイスキーをちびちび
舐めていたら

だんだん切なくなつて最後には涙が止まらなくなつてヒクヒクしな
がら泣いていた。

あなたと別れたあの頃、いろんなことがあつたけど

私は平気なフリして通過してきた。

そして冷たい硬いものを胸の中に作ってしまった。

ずっと自分は平気なんだって信じていたのに

冷たいものは小さく砕けながらも私の体に埋まってしまっていた。

あの頃のあなたのさりげない優しさのおかげで
私は自分は幸せなのだと思えた。

けどね

幸せって思いつづけることは
時に酷く難しいこと。

胸の中の塊が心を冷やす

自分から幸せを壊してしまいたくなる
すべてを拒絶したくなる

もう18なら分かってくれるよな。

そんな簡単な弁解で父親に捨てられた私。

納得したフリしてうなずいた惨めな私。

あの頃から胸の中の塊が幸せを拒んでいた。

今はまだ幸せとは言いきれないし

昨日の夜みたいはどうしようもなく悲しいこともあるけれど
それでも目がさめれば冷たい塊を認めて笑うこともできる。

それはきっとあなたがくれた、ミルクティーみたいなさりげない優
しさを

ちゃんと知っているから。

今日は雪が降っていて良かった。

手にとった溶けてしまった雪で腫れたまぶたを冷やす。

それぞれの夢（前書き）

文章中のあなたと「」の中のあなたは対象が違います。
ややこしくてすみません。

それぞれの夢

あなたは昔、わたしだけにこっそり教えてくれた。

将来、パティシエになりたいんだ。

それは普通の男の子らしくなくて
私はちよつとビツクリしたけど、

やっぱり普通の男の子と違って甘いものが大好きで
私と行くカフェでいつもケーキを頼んでたあなただったから

そして普通の男の子と違って
甘い優しさで

その頃いつもイライラしてた私のとげとげを
溶かしてくれていたあなただったから

なんだか心の底から納得して

じゃあ、パティシエになったらまず私にレモンタルトを作ってね。

ってかなり本気でコメントした。

そんなあなたが私の職場の近く

ほんの3区画いったところにあるちよつと高級なレストランで
ほんとに夢をかなえてたってことは

なんだかまぶしいくらいキラキラした現実だった。

私の夢はなんだったけ・・・？

あるときあなたにこっそり告げた気がする。

それはたしか・・・。

いつの間にか自分の夢にまっすぐに向き合えず
夢とは違う望みを抱えて

友達がうらやむような安定した大きめの企業で働くことを決めた私。

そんなわたしの今を、

あなたはどんな思いでみたのかしら？

「ねえ。あなたの夢はなんだったの？」

私は彼に聞いてみた。

真っ白のふわふわな枕に顔を半分うずめて、
気持ちよさそうに眠り
入ろうとする彼の横顔を覗き込んで

「ねえ。」

甘えたようにもう一度問い掛ける。

彼は寝ぼけた顔で、でもちゃんと優しく笑って私の髪をなでた。

「どうしたの？突然。」

彼は優しい、でもそれはあなたとは違う。

あなたの甘くつてもさらっと溶けてしまいそうな懐かしい優しさ
とは違う。

彼の優しさは色んなものを入れた男の余裕の優しさ
恵まれたものが恵まれないものに捧げるおこぼれの優しさ

「ちょっと聞いてみたくなったの。ねえ、あなたも夢をもっていた
？」

しつこく聞く私を見て、彼はしかなく思いをめぐらせ

「うーん。・・・あそうだ。」

なにか思いついてクスクス笑う。

「あんまりかわいい夢じゃないなあ。」

「なあに？教えて。」

「社長。・・・小学校の文集にそう書いた覚えがある。」
私も彼と笑った。

ほんとにかわいくない・・・でも彼らしい。

「もうすぐ夢がかなうね。」

「うーん。」

わたしの言葉に、会社の社長の娘と結婚している彼はばつが悪そうに布団を頭までかぶった。

でもわたしはそれが困ったフリだってことわかってる。

私たちはそういう関係だから。

「自分は？自分の夢は？」

布団の中から彼の声がする。

私の腕をつかんでひきよせる。

「内緒。」

「そんな返事は許しません。」

彼はわたしの体をくすぐってわたしは体をくねらせた。そして二人で笑った。

私は彼の頭を捕まえて軽いキスをする。

「今度遊園地にいこうか？」

そしたら教えてあげる。」

もう夢を語ったあの頃にはもどれない。

だけでも少しだけあの夢の原点を見たい気がした。

それぞれの夢（後書き）

よんでくださってありがとうございます。
できたら感想お願いします。

あなたのいる場所

冬はどんどん押し寄せる。

バケツの水にたらしめた紺色の絵の具がとけるみたいに、あつというまに。

静か

目の前を騒々しく通り過ぎていく親子や女子高生グループやカップルは
楽しそうに暖かそうだけど
私のまわりには無色透明の冷たい氷の壁があるみたいだ。

冷たい気体をすいこんで白い息を吐く。

私は自分の体温で必死に夜の闇を暖める。

凍えないように。

あなたが働いているというレストランの窓からは柔らかなあかりがあふれていた。

私との間にある二車線の車道は渡りたくても渡れない冷たい氷河のようであり、

私を守る厚い氷の防御壁のようだった。

あなたと再会してから、あの道を通る度、私の足はあの場所で動けなくなった。

それはきつと数十秒間だけのことだけど。

お皿を運んだり、下げたり、あなたとは違う男の人や女の人が窓の向こうにみえた。

デザートの説明をしているっぽいあなたの姿も2回みることがある。

どちらにしろ、それは私のもう知らない、あなたの世界。

あなたはわたしに

「通りかかったら顔だしてよ。サービスでスペシャルデザートつくるから！」

って言うてくれたけど、そんなに簡単に過去を飛びこえられるほど私は強くないみたいだよ。

だからあなたが私を見つけて、扉を開けて、反対側の歩道から私の名前を呼んだとき

わたしはすぐくつろたえてしまった。

「仕事帰り？よってきなよ。俺おごるから。」

あなたの笑顔に負けないように、なんでもない笑顔を作ろうとした。

私はこんな場所でたちどまったりしない。

あなたの姿を探したりしていない。

ただ通りかかっただけなのに偶然だね。

そういう笑顔。

「今日は帰る。」

でもその声は力なく、あなたまで届かなかった。

「ちよつと待ってて！」

そのまま立ち去ろうとする私を呼び止め、あなたは車の合間を縫って、二車線の車道を渡ろうとする。

こないで。と私は思った。

私の世界にこないで。この壁を飛び越えないで。

「今日は急いでるの！！また今度ね！！」

必死に叫んだから怒ってるみたいになった。あなたは

「うん。またね。」

って手を振ってくれたけど、寂しそうな顔をした。

また昔のことを思い出した。

あの日、昔よく行った喫茶店、あなたを傷つけた夏の日。柔らかで、年下で、ちよつと頼りないあなただったけど涙を見たのははじめてだった。

ごめんね、さよなら、げんきでね

ありきたりな言葉でお別れして、逃げるように去った私。

あなたは最後につぶやいた。私に向けてなのか、独り言なのか分からない調子で。

「俺の作ったレモンタルト・・・食べさせたかったなあ・・・。」
あなたの視線の先にはグラスに残ったレモンの輪があった。

足をはやめると、私のまわりの空気はもっと冷たくなった。

もう二度とあの店の前で立ち止まったりしない。

薄暗い部屋の中

薄暗い部屋の中、浅い眠りから私を覚ました軽やかな電子音。

ベッドから手を伸ばし携帯電話を開くと、あなたの名前があらわれた。

薄暗い部屋の中、携帯電話の画面だけが明るく、あなたの名前を点滅していた。

あれがあなたからののはじめての着信だった。

だけど私はなんとなくそれを予感していた。
もしくはそれを待っていた？望んでいた？恐れていた？

私は冷静にその折りたたみの携帯電話を閉じると両手で包み込んだ。
着信音が漏れないように。

その場違いに軽やかな電子音はやく消えてくれるようにと祈りながら。

静かになった部屋に安堵と寂しさを感じながら、再びベッドに潜りこむ。

そして暖かい彼の二の腕に頬をよせる。

「であればいいのに。」

私のおでこにキスをするくらいの場所に顔を傾け、彼はささやいた。

「他の男？」

「そんなんじゃない。」

少しの間まの後、私が答える。ささやくように。

彼はふっと笑うと私のおでこにキスをした。

「でも愛おしそうな顔してたよ。」

「そんなんじゃない。」

私は同じ言葉を繰り返した。一度目よりも少し強い調子で。

「ふうん。」

まるでどうでもいいことみたいに軽く流して、今度は私の体全部をぎゅっと抱きしめて、深いキスをする。

彼の胸は広い、彼の腕は力強い。

私は一人の男に守られ、愛されているような錯覚をする。一瞬だけ。

「そろそろ帰るよ。」

いつも通りの時間にベッドから起き上がり、彼は帰宅の準備をした。ワイシャツのシワを伸ばし、スラックスをはき、ベルトをしめる。

そのとき、あなたからの二度目の着信があった。

私と彼は少しの間、動きを止めて無言でその着信音を聞いていた。

「であればいいのに。」

先にそれを手にとったのは彼だった。そのまま私の前に差し出すと優しく、甘くて、余裕な顔で笑う。いじわるな目をして。

「たまには焼きもちやかせてよ。」

「そんなもの焼かないくせに。」

余裕な顔で言い返したかったのに、私は怒って、動揺していた。

ほとんど勢いで携帯電話を開き、通話ボタンを押すと、もう、私は泣きそうだった。

薄暗い部屋の中（後書き）

読んで下さりありがとうございます。

約束

電話からは車の音とか人の声とかが聞こえて、あなたの声は少し聞き取りにくかった。

あの寒い空の下にあなたはまだ居るんだってわかった。

「もしもし」

あなたは柔らかい声で私の名前を呼ぶ。

「今、店を出たんだ。・・・今日は寒いね。」

あなたの吐き出す息の温度が電話越しに私まで暖めているような気がした。

私は、うん、とか、そうね、とか短い言葉を返した。

あなたの声はいつも私を懐かしさでいっぱいにする。

「あつ。突然電話してごめんね。今大丈夫だった？」

私は部屋を見渡して返事を考える。彼が買ってくれたセミダブルのベッド。ついさっきまで私たちはそこで抱き合っていた。彼はネクタイの形を整えている。

自分の場所を確認して安心して私は返事をする。

「うん。大丈夫よ。」

ネクタイを整えた彼は私の後ろに立って、しっかりとした腕で私を優しく抱きしめた。私は彼の腕の中であなたの声を聞いていた。

「今日は会えてよかった。あつあれは会えたっていわないかなあ・・・」

今度ほんとに店にきてよ。約束だよ。」

笑いを含んだあなたの声。私は暖かい明かりに包まれたあなたの働くレストランを思い浮かべ、その扉を開く自分を想像する。

「そうね。約束する。」

口にだしても、それは叶わない約束のような気がした。それくらい重い約束だった。

「ねえもうすぐ誕生日だったよね？豪華なケーキ焼いてまつてるから。」

季節柄レモンタルトはないんだけど・・・。」

少しの沈黙のあと、自然と言葉がでた。懐かしさと感嘆をこめて。

「覚えててくれたんだ。」

私の誕生日を。私の好きなものを。

「うん。誰か誘って来たらいいよ。友達とか」

・・・嫌じゃなかったら、彼氏とか。俺は全然大丈夫だから。」

あなたは笑って言ったので、私も笑って返事をした。

「そうね。聞いてみるわ。」

私は暖かい明かりに包まれたあなたの働くレストランを思い浮かべ、その扉を開く自分と彼を想像する。

彼がいたら、私は毅然として今の自分でいられるだろう。そして色々なことをきちんと過去にできるのだろう。

あなたの優しさとか、あなたを傷つけたこととか。

今のあなたの姿は、私の中に作ってしまった冷たい塊を、少し溶かしてくれるかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0506a/>

ミルクティー

2010年10月30日09時31分発行